

自ら墓穴をほる者

因果

善因善果、悪因悪果、因果は彼自身のこうした規定を一步もまげることゝゆるさない。しかし彼は決して人から自由を奪はわなかつた。

悪も時には榮えて一朝の花と咲けば、善も時にかくれて、不幸逆境に泣く人を造る。

真実は通る、とは人の常識であるけれど、易々として真実が通るならば真実の権威はあり得ない。真実が末通るためには血の洗礼を要求する。そこに真実が真実としての権威を持つ。

善人も榮えれば、悪人も榮え、善人も衰亡すれば、悪人も滅するかの如く見える。

凡人はこれあるが故に、悪の深淵に自らを陥れ、賢者善人はこれあるが故に、自ら謹み、自らはげむ。

真実の大地に足を運ばんとするか、煉獄の火に身を焼かんとするか。そは汝のその行為の尖端がいつれの方向にむけられつゝあるか、その動機の底辺に何が横たへられつゝあるかを知れば即ち足る。

汝のすむ世界は、汝の一切によつて決定せられる。すべて他の何物も支配することなし。汝の住む殿堂は汝によつて築かれ、汝を葬むる墓穴はただ汝によつて掘られる。

怪火

天を焦すような紅連の炎が静かな村落の夜の空気を破つた。

鐘の響、ポンプの音、わめく声、泣く叫びが、やがて火を中心に高なり初めた。

怪火は見る間に四軒の家をなめつくしてしまった。

人々が必死になつて消火につくす頃、一人の怪しい男が、わななく胸を抱きながら細道を走り去つた。しかしそれを知る人はなかつた。

焼けおちた家の中には、雑貨商がいた。財産のない一家もあつた。昨年は足を怪我して長く養生に困つていた一家もあつた。

気の毒なのは、最初に火を見たが故に火元だとされた貧しい一家である。眠りより覚めて見れば、彼らはほとんど火の中にいた。四軒の内、彼の家が最初に焼けたときへ知らぬのに、怪火の火元として一身に責任を負わねばならなかつた。夢の如く感ずる彼は警察署でただわけもなく泣いた。再び家を造る資力さえない彼の一家は、責任を感じ、罪を感じて、社会への申しわけに、谷の奥にしりぞいて、小作によつて衣食の道を開こうとした。

半焼けの一家が修繕された外、そこが荒地にかわつてから、数ヶ月間、人々はこの火事の事を忘れたかのようであつた。俄然、この平和なる村に、疾風の如く司直の手が動きはじめた。そうして思いがけない犯罪は曝露された。

犯罪

火事に出会った者の中に秋三郎という男がいた。彼はいわゆる才物らしい質の男である。彼の心の奥はいつたい何であるかを知ることが出来なかつた。けれども彼は決して今日まで悪人ではないと思われていて、信用されない男ではなかつた。

彼は昨年、その家屋と、彼が店の雑貨商品とを保険に入れた。両方で保険契約金は一万円であつた。彼は、この度の火事で、思いがけなくこの一万円の保険金を手に入れることが出来るのであつたが、彼は、この一万円を八千円に妥協して受取るや△△市に出てしまつた。彼は不幸中にも幸福だと人々からいわれてゐた。果して彼は幸福であつたのだろうか。こゝに彼を中心に恐ろしい犯罪は遂行されてあつた。事件の概要はこうである。

秋三郎はもと数万円の財産を所有してゐたといわれる。けれど彼は相場に手を出して是をなくするや、心の中にはまさに一獲千金を夢みてゐた、そこに彼は、保険詐欺という一つのたくらみを考え出した。けれども彼とて、彼自身が彼自身の家に火をつけて焼く勇氣はなかつたので、考えた末、彼はこの計画を伊五郎にうちあけた。伊五郎はもし目的成就の場合はその四分の一を分配されることを約束した。

伊五郎、彼は今や五十の坂を越してゐた。しかし彼は仕事というものをもたなかつた。彼は今日まで受け継いだ財産数万を使い果たした。のみならず、彼は極めて女色におぼれて、ほとんど色魔だとさえいわれてゐる。しかし彼とて根よりの悪人ではあるまい。彼は弱いのだ。弱いということ、それは人間のいやな性格の一つである。弱き善人は悪人に相等する。弱きが故に人は悪の深淵に引きずられてゆく。

もしこの時伊五郎が、きつぱりとはねきつたならば、そしてもし

「秋三郎よ、そんな馬鹿な真似はすな！ お前も相当財産も持つていて困るじゃないし。やめておけ。いいか、もしお前がそんな真似でもしたら、俺だけは知つてゐるからな。」

と秋三郎の胸に何もものかのひらめきをあたへてやつたならば、この事件はおこらなかつたであろう。しかるに伊五郎は、金のためにこの仕事に加担することを約束した。多くの場合に最初の一步が軽卒に無反省に始められる。それがやがて大きな苦杯となつてその手にかえされて来る。

伊五郎は更にこの依頼を果すために第三の数男に相談し、かつ依頼した。「お前は秋三郎の家に火をつけてくれないか。」と秘密の相談を持ちかけたが、数男はこれを拒絶した。拒絶せられた伊五郎は、事件の発覚することを怖れて、数男にかたく口どめし、かつ三十円の金を貸与してこの秘密のもれることを防いだ。

伊五郎は更にこれを京二に命じた。京二は財産を持たなかつた。彼は日傭人かせぎをしたり、炭焼きを仕事としてゐた。彼は伊五郎の依頼を拒絶することが出来なかつた。彼はついにこの恐るべき計画を実行することを承諾したのであつた。

犯罪の中心人物である秋三郎はその頃、街に出ておつた、そして貨物自動車に一台の肥料を事件のおこされるその日にすら町からあげた。屋根の大改善だとして材木も買こんであつた。木炭も二百俵買入れてあつた。あるいは競売に出かけては数多の家具も買入れた。かくして彼は一切火事が故意のものでなくて、偶然に思いがけなく見舞つたものゝ如く装うた。

ついにその夜は来た。京二によつて火は、この雜貨商秋三郎方と、その上み隣の家との間から起こされた。しかし火はその上み隣より燃えはじめ四軒の家を焼いて静まった。犯された罪、それは再び旧態にはかえらぬ。

傷つけつゝ、

我らはこの犯罪がいかなる緒口より発見せられたかを知らない。巷間伝えて、秋三郎は、かねての約束であつた所の割前金を誰にも与えずして街に出たために、彼ら一味の仲違いより発覚したものだともいう。

罪なき村の人たちは、わずかの関係から次々と警察によび出される。純朴な村人たちは、警察によばれてすら、安らかな日暮しをすることが出来ない。のみならず、無益に日時を費される。

火事があつた時、親切な村人達は、あるいは衣服を、あるいは食物を、見舞金を彼らに典えた。あるいは家なき彼らの一家を暫く宿めてやつた一家もある。ある者は秋三郎のとつた頼母子講の金の保証人になつた人もあれば、保険金受け取の保証人になつた人もある。しかしこれらの人たちの親切は今や全く蹂躪せられてしまつた。

人の真情をふみにじること。それこそ罪悪と名づけられるべきものではないか。

真実はこれを受入れるか、あるいはふみにじるかである。

親の真実は子供によつてふみにじられ、子供の真情は親の我慢によつて蹂躪せられ、妻の誠が夫によりて、夫の誠が妻によつて、ふみにじられる。

3

我らは真実をふみにじることを「傷つける」という。静かに内省する時、我らは一切の真実を合掌して受けたか、我らの我慢と貪愛と瞋恚は、我らに最も近き人たちを傷つけながら生きてゆくのではないか。誰か秋三郎の姿を見て、秋三郎のみの姿ということが出来よう。

教養

我らは人の世の罪悪が社会組織の劣悪なるが故に犯される場合のあまりに多いことを知っている。貧なるが故に盗みを働く者がある。貧なるが故に家内を殺して自分をも亡す者がある。あるいは社会習慣のために虐げられて犯す罪悪がある。働いてもくゝ一家を養うことも、教育することも出来ないこともある。かゝる客観的性質をおびた罪悪の地上に存在することを知っている。

しかし、我らの社会が一切の富を平等に分配し、一切の権利が平等に行使される日が来た時、果して地上には罪悪があつて絶つてあろうか。

今ここに引用した犯罪が果して杜令悪より発生せしものであろうか。秋三郎には店の貸付だけでも二千元を有していた、彼は猶不動産をも所有していた。伊五郎は生来の怠惰者であつた。

社会組織の如何にかゝはわらず人の内心に巢食う悪魔煩惱は、時にその狂暴性を發揮して、不慮の悲惨事を暴露する。

釈尊は、人生は苦なりと断言し、その苦の原因を集諦なりと言つた、集とは集めること、愛せんとする人と、財とを無限に集めようとする渴愛の心、煩惱の心である。

愛欲、権財欲の底には、無明が横たわる。新聞の三面記事の大部分が、皆、色と物とに対する痴より来ているのではないか。

我らは限りなく住みよき社会を創造しなければならぬ。そのためには社会的欠陥の世界的改造を急がねばならぬと共に、個人の上に高き深き教育を与えて主観の世界の向上統一をはからねばならぬ。

新社会発達の阻害

彼らは今や未決囚として刑務所に收容せられた。この事件たるや村落におきた平凡なる放火犯にすぎない。しかしながら平和なる村落の人心を悪化動揺せしむるには十分である。

保険は現代の社会が生んだ一つの制度である。一度火難に遭遇するか、あるいは大黒柱たる主人を失う時、一家はたちまち迷わねばならぬ。ここに連帯の責任を大衆の上に移して相互扶助の目的を達するのが保険である。かゝる犯罪が行われた時、保険会社は交附した金額の全部を引取るであろう、もし本人が使い果しているならばその保証人は迷惑を分けねばなるまい。又火事がある度に放火の嫌疑をおそれて、こうした地方では保険事業の進歩を阻害するであろう。

人は社会に恐怖を感じる時、心霊の扉を閉じて、人を見れば泥棒と思えの心を深くする。ましてや飼犬に手をかまれた者は、いかなる犬をも近づけなくなる。

かくして世は益々複雑となる。複雑になるに従って益々社会は法律化されてゆく、法律によつて、縛られてゆく社会は決して自由でもなく健全なる発展でもない。社会4は果して進歩しつつありや墮落しつつありや。

警告

「汝は汝の行動をして人格的ならしめよ。」

そはいかなる時代にも、いかなる所においても正しい人類への無上命法である。

たとえ地上にいかなる社会が出現し、いかなる理想的制度組織の生れる日が来ても、悪のゆるされる時の来る時は断じてない。努力する者が何等かの意味において、優者であり、悪質にして、不真面目、怠惰にして、働かぬ者の成功する社会は永遠に地上には来ない。時に働かずして富む者があるとしても、それは決して非人格的、放埒な生活をすべしとの定理を生み出さない。

若き者よ！ 正しさを求めよ！

汝等の心の奥に巢食う悪魔と戦つて征服せよ。

汝の播いた種は汝によつて刈らねばならぬ。

人類の智者は、運命論をひきやぶつた、祈祷の無効を宣言した。無智なる享樂からさめた。安価なる逃避から出よと教えた。

そはいつたい汝に何を教える。

汝の道は汝の精進によつてのみ開かれる。汝を高き殿堂に運ぶ者も汝であり、汝の墓穴を掘る者も汝である。

憶え！ 一度汝が汝を地獄の底に見出した時、その時流す悔恨の涙が何をもたらすか。

秋三郎が未決監に流す涙に彼の一生を新にする力があるか。

危険なる哉！ 人生！

我は汝に警告す。汝は汝の駒の手綱を厳粛にひきしめよ。一切の価値生活は、ここを出発点とする。

真実の強者

真実。

それは万人の求めているたつた一つのものでなければならぬ。
真実を求める心の鈍った世界は腐つてしまふ。沈滞してしまふ。

覚めたる心は、真実を求めて走りつゞける。

真実は純なる赤い血である。

真実はこれを受入れるか、これをふみにじるかである。真実をふみにじる、それが即ち罪悪である。

私どもの生活が不断に人の真実をふみにじつていることを考えた時、私の救われざる相を発見する。

高慢。それは真実をふみにじつている者のすがたである。

維摩経の中に、救われざる二つの相としてこういつてある。

「二着輕慢新学菩薩、而不教誨 二者雖信解深法、面取相分別。」

一人の学者の僧侶がある、後進の人の説を頭ごなしにしたり、学問が浅いと悪罵したり、輕蔑したりして、自ら高慢になつてゐるなどがその一である。自分の知つてゐる教法の型に囚われて自ら独り知れりとするのがその二である、共に寂しい人間のすがたである。真実はこうした人によつてくらまされる。

素純とか、へりくだるとかの言葉を弄んで、へりくだつてくれない自分を忘れて自分を偽つてゐるのは虚偽である。そうした虚偽が侮辱されるとしても、それは決して謙讓な態度が嘲笑されるべきものであるということではない。

謙虚さのない宗教家、思想家、学者、それは多く「取相分別」の人である。「我一人真理をつかめり、我一人さとれる者なり。」と叫ぶ人の前には生きた真実は姿を消している。

知ること、知ることをしないから、真貴をふみにじる場合が多い。人類の先駆者たちが苦しい道を血みどろにされたのは多くは無智なる民衆と固陋なる学者たちによつてであつた。

無智なる民衆は彼らの恩人をしばく葬つた。しかし来るべき時代は葬つたと思つた人によつて率いられて来た。

愚なる民衆は何時も偶像崇拜者であり、盲目的神秘主義者であつた。彼らの生活がそれに禍されてゐることを叫ぶ時、彼らはすぐ刃をむける。

無智は時に罪悪である。

自分が会つたこともない、聞いたこともない、讀んだこともない人の思想や信仰をまちがいだと民衆に向つて不用意にさげふ人がある。それは知らぬからおこる罪悪である。知らぬが故に真実をふみにじるのである。

私は弱い人をすかない。弱くなることを墮落だと思ふ。強い人になりたい。

弱いというのは、真実に対する信條に動きのないことである。情実や威圧や脅迫によつて、妥協したり、あいまいになつたり、変節したりしないで、強く一本調子で進むことである。真実に対する信念が、鉄のように堅い人が集つた世界は、決して灰色ではない。彼は虚偽を何よりもすかない。上塗りの化粧を嫌う、堂々と主張し、公明に生きる。タゴールの書いたゴーラのように。

たいがいのはゆるせ。右でも左でもよいことは自由にさせていい。小さいことにまで腹を立てたり、暗い顔をしたりするのは腹が小さいからだ。

しかしたつた一つ、真実がふみにじられても、黙っているのは卑怯である。人生々活の本質を棄てるのである。ずるい功利主義者は自分の利益のために、安価な平安のために、真実がふみにじられても黙つておる。真実に対する強い信念を欠いだ男は最後になるほどあてに出来なくなる。

キリストは十字架にかゝつてもたつた一つの真実に生き、親鸞聖人は念仏一つのためには、何でも棄てた。身を以つてなざる顕真実、その生活態度こそ、男性の中の男性の特質である。

深まるということはいゝことである。しかし深まるとはやたらに変わることはない。

自分全体が宗教であり、全身全霊が念仏であるものにとつては、昨年唯心論であつて、本年は唯物論者であるという人のように、早變わりの芸当は出来ない。

變るとは立場をかえることである。キリスト教徒が仏教徒に變つたり、仏教徒が回教徒に變つたり、何の苦悶もなくせられるならば私はその人を信ずることができない。

真実は深まる井戸の底にくまれる。井戸から井戸に早變わりして移る者には、清水はのめない。タゴールはタゴールであつて、ガンジーを聞けば急いでガンジーに塗り替え、親鸞が日蓮の真似をし、日蓮が源信の真似をする所には何もものなくなる。

何でもすぐ古い型をもつてきてあてはめようとする者がある。時代が何であろうと、世の進歩が何であろうと、そんなことには関心なく、古い型を持つて来て、若い者の道をふさぐ老人がいる。宗教界等で特にそうである。この種の人たちが社会からおき去りにあうのはもちろんのことながら、真実をふみにじることまた大である。

しかし又一方には、何でもそれは古い、これも旧式だと、新らしがり一方の人がある。それは浅薄である、それは決して真実をたづねる者の忠実な態度ではない。印度に裸形外道というのがあつた、彼らは、衣服をつけなかつた。釈尊は決して彼の生活態度をおほめにならなかつた。

我らは真実という言葉の下に、この裸形をそのままに出して恥ぢない。はだかのまゝがいのだ。赤裸々がいいのだとて、汚いまゝをだしてゆくことが道であるかのように考えることである。

近代の一つの傾向として、疑問の神殿に祭りあげられている者をば、一度これを物として大地の上にひきづりおろした。そうして、聖者とか、神人とか、生仏とかいうものの本体を明かにした。そしてそれが大概、土くれであることが曝露せられた。そうしたことが因となつて、時代の洗礼をうけた者にとっては、拜むということは奴隷道徳であるとされた。かくて我らは無智なる邪なる暗い殿堂から明るい人間の曠野に放たれた。

先生も学生も変わったものではない。礼儀などいうことは、封建時代の遺物である。主張せよ、生きる権利を主張せよ。富豪が一万円寄付したつて、それは彼らのなさねばならぬ義務である。かくして時代は何ものを切りひらいて、その真相をつきとめて、裸形を街頭にさらしてゆく。都会はもちろんのこと、田舎の静かなる村落も、政治運動のある度毎に荒されてゆく。

涅槃経をひらいてみると、罪悪に悩むアジャセ王に道をすすめる六師外道の徒輩と仏説を奉ずる耆婆大臣との話が出ておる。六師外道の人たちの説は責任を他に転換することに表されているが、ただ耆婆の説は

「大王、諸仏世尊つねにこの言を説きたまはく、二つの白法あり、能く衆生を救う。一つには慚、一には愧なり。漸とは自ら罪を作らず、愧とは他に教えて作らしめず。漸とは内に自ら羞恥す、愧とは発露して人に向ふ。漸は人にはず、愧は天にはづ、これを慚愧と名づく。慚愧無き者は名づけて人となさず、名づけて畜生となす。慚愧あるが故に、則ち父母師長を恭敬す……」

かくの如く、慚愧の心、はづる心を人の道だといっている。このはづる心とは、裸形のみである醜悪さを憶面なくおし出してゆく心ではなくて、はづる心の中に、人間としての道を見るのである。真実をふみにじつたアジャセ王に、このはづる心がおきたのであつた。それは、真実を見る心の眼が開きはじめてたのである。はぢを知らぬ心は真実をふみにじる心である。真実がふみにじられる世界は畜生道である。

現代の世相の一つは、この無慚愧の裸形のまゝで真実であると誤れる者が増してゆくことではあるまいか。